

2023.5.31 第4回霊的講話 「山上の説教②」

皆さん、お早うございます。気象庁は一昨日、「九州から東海地方が梅雨入りしたと見られる」と発表しました。しばらくは雨の多い、うっとうしい日が続きます。もちろん、多過ぎ得る雨も困りますが、でも、日本のように多くの雨に恵まれ、木々や草花そして農作物が順調に育つことがいかに恵まれたことなのか、私たちは後で気付くと思います。

さて、この霊的講話では、前回から、マタイによる福音書の山上の説教を取り上げています。今日はマタイによる福音書の5章38節から42節までを一緒に読みたいと思います。

新約聖書の8ページを開いてください。

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン（1ミリオンは約1.5 kmです）行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」

38節には「目には目を、歯には歯を」という、私たちも聞いたことのある有名な言葉が記されています。この言葉は、イエス様の時代でも「やられたらやり返せ！」と復讐や報復を奨励する言葉であると、少し間違っ理解されている場合が多かった様です。この言葉は旧約聖書の出エジプト記にありますが、その前後の文も含めてきちんと読めば、意味するところが分かってきます。この「目には目を、歯には歯を」とは、元々は、ある人が他の人に傷や損害を負わせたら、その人は、その傷や損害に見合うだけの償い、同等の損害賠償をきちんとしなさいという命令なのです。言い換えれば、損害を与えた人は、損害を受けた人への賠償を渋ってはいけなし、逆に、損害を受けた人も、受けた損害以上の不当な賠償を相手に要求したり、必要以上の復讐をしたりしてはいけないという戒めなのです。

このような過度の復讐や報復を抑える戒めがなく、テレビドラマの半沢直樹のように「倍返しだ!」「百倍返しだ!」と叫んで、互いに必要以上の復讐を繰り返していけば、憎しみと争いの連鎖は途方もなく大きなものになるでしょう。

もちろん、法律で国を治める法治国家であれば、法律を破った人は正しく裁かれ、処罰される必要があります。しかし、裁判官が個人的な復讐心で判決を下すことは許されません。

また、現在のウクライナのように、不当な侵略を受ければ、抵抗し戦うことも必要でしょう。しかし、テロへの報復を理由にアメリカ合衆国がイラクやアフガニスタンに侵攻したために、かえって収拾がつかない泥沼状態に陥った例もあります。

また、次の「右の頬を打たれたら左の頬を」や「下着を要求されたら、上着も」という言葉も同じです。私だったら、右の頬を殴られたら、五、六発殴り返すかもしれませんし、下着を出せと言われたら、「何を言っているんだ！」と相手を罵って突き飛ばして下着を奪い返そうとするかもしれません。でも、イエス様は、その発想を、その考え方を変えなさいと言われていていると思います。「相手に対する仕返しや復讐を考えるのではなく、その人にとって本当に必要なもの（その人も、自分の本当の必要には気付いていないかもしれません）は何かを考えなさい。そして、その人が真に必要なとしているものを、あなたが自ら進んでその人に与えなさい。」私は、イエス様がそのように言っておられると考えています。

さて、皆さんは、アフガニスタンで長年、医療活動に従事され、2019年に銃撃によって亡くなられた中村 哲先生という医師を御存じでしょうか。中村先生が医療活動を行っていた当時のアフガニスタンは混乱の極みにありました。アメリカ合衆国は、2001年に起きたアメリカ同時多発テロの実行組織がアルカイダというテロ組織であると断定します。このアルカイダは、その前の湾岸戦争で、アメリカがイスラム教徒の国であるイラクに攻め入ったことなどを非難し、アメリカへの度重なるテロを仕掛けていたのです。アメリカは同時多発テロの報復としてアルカイダの本拠地があるアフガニスタンに侵攻、攻め入ります。そして、アメリカが支配した後も、アフガニスタン国内では多くの紛争やテロが頻発し、まさに、復讐が新しい復讐を呼ぶという巨大な憎しみと報復の連鎖が国を支配していたのです。

その中でも、中村先生は献身的な医療活動を続けていました。やがて、中村先生は、アフガニスタンの住民の極度の貧しさが病気や紛争の温床（原因）になっていること、そしてさらに、その貧困の原因は、乾燥して砂漠化し荒れ果てていく国土にあることに気がきます。中村先生は、住民の平和で安定した生活に必要なのは、決して一時的な資金援助や武器ではなく、豊かな収穫をもたらす農作地である、そして、その農作地をよみがえらせるためには、乾燥した大地を潤す多量の水が必要であると考えます。そして、中村先生は、医師でありながら、独学で灌漑事業や土木工事を学び、現地の人々を組織して、20km以上の彼方にある大きな川から水を引くために大規模な水路を作ります。そして、乾燥して草木も生えなかった広大な土地を緑豊かな農作地に変え、何十万人もの農民が暮らすことのできる豊かな土地を与えることができたのです。

この中村先生も、それまでの医療活動や灌漑事業を進める上で、多くの妨害や損害を受け、共に働く日本人青年や現地スタッフが殺害されるという悲劇も経験しています。でも、中村先生は、その妨害に屈服して諦めるのではなく、また、危害を加えた武装グループに復讐するのでもなく、先ほど述べたように、アフガニスタンの人々に本当に必要なものは何かを考え、その必要を満たすために多くの犠牲を払ったのです。

この中村 哲先生については多くの本が出版されていますが、特に御自身の著書「天、共に在り」の中では、御自分の生涯とアフガニスタンでの医療活動や灌漑事業について詳しく述べておられます。興味のある方はぜひ読んでみてください。なお、この著書の題名「天、共に在り」は、「天、すなわち神様がいつも私たちと共におられる」という意味であると、中村先生御自身が説明されています。学生時代に基督教の洗礼を受けられた中村先生の心の中にも、今日お読みした聖書の言葉が生きていたのだと私は思います。

さて、今回は、43節以降の「あなたの敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」というイエス様の言葉について、御一緒に考えたいと思います。

それでは、今日も一緒に、「主の祈り」を祈りたいと思います。